

〈子どもの姿〉

☆ 2歳児 M児

- ・言葉の発達がゆっくりで「やりたいこと」「してほしいこと」の欲求がうまく伝えられない。(英単語、物の名称のみ)
- ・保育者の指示で動けない
- ・友だちの輪に入ることが難しい。

〈なぜ?〉

- ・単語ばかりを口にするのは、視覚的に見えることだから言葉にしやすい?
- ・言葉の理解が十分でないから?
- ・言葉を溜め込んでいる時期?



〈具体的な手立て〉

- ・午後の子どもの人数が少なくなり、落ち着いてきた時間帯に1対1のゆったりとした時間を設けて絵カード(あいうえおカード)を遊びに取り入れた。
- ・言葉と絵カードを用いながら指示するようにした。
- ・英単語に興味があり、言葉として入りやすいようなので「行く」などの動詞は「go」と英単語でジェスチャーを交えて伝えるようにした。



〈その後の様子と気づき〉

- ・絵カードに興味を待って言葉のやりとりを楽しんでおり、以前より言葉数が増えた。
- ・カード遊びを通して、少人数なら友だちの輪に入れれるようになり友だちの名前を言葉にする等、友だちへの関心が高まっている。
- ・場面によって、絵カードを見ることで保育者の指示で動けるようになった。



〈考察〉

- ・人に対しての興味や印象が薄い子どもに対しては、「△くんが○○するよ」や「先生が○○するよ」等、視線が人に向くように2項関係から3項関係にしていくことが大切である。また、言葉だけではなかなか指示が分かりにくい子どもには絵カードを用いて視覚的な支援をしたり、数字や時間などもストップウォッチを使ったりして分かりやすく視覚と聴覚の情報を用いて支援するという方法があることを学んだ。



保育の中でゆとりのある時間をうまく活用し、子の関心に合わせたカードを使って、意識的に1対1でのかかわりを行ったことがとても良いと思 ます。

木曾先生より

3歳児 A児

クラスの背景

○3歳児 20名 3人担任

○配慮の必要な児童が2名

○個別での声掛けが必要な児童が多数



【子どもの姿】

- ◎食べることへの意欲がない
- ◎片付けの時間になると切り替えが難しい

【なぜ】

- ◎食に興味がない?
- ◎食べさせてもらうことに慣れている?
- ◎遊び足りない? 壊すのが嫌?

【具体的援助・手立て】

- ①自分で食べようとする姿を見逃さず褒める
- ②一口の量をフォークに乗せて置いておく
- ①一度気持ちを受け止める(作ったものを褒めるなど)
- ②「自分で片付ける?」「他の人がする?」など選択肢を出す

【その後の様子・気づいたこと】

- ①家庭と連携し、自分で食べるよう励ましながら関わると、食が進むようになった
 →家庭と保育所とで連携を取り、共通した関わり方が出来たため、変化が見られたのではないか
- ②その都度「食べるよ」と声掛けをするより、一口の量を置いておく方が進みやすかつた
 →食べるよう促す声掛けばかりであった為、楽しくない雰囲気での食事になっていたのかもしれない

- ①日によって、受け止めるだけでは気持ちの切り替えに繋がらない日もあった
 →効果の有無に関わらず、気持ちを受け止めることは継続している
- ②自分で作ったものは自分の手で片付けたいという気持ちが十分にあったため、効果的であった
 →片付けにスムーズに入れない時にはこの関わりがスムーズであると気付いたため、継続している

研究の実践全体を通した考察

各保育所の対象児童の様子を共有し、『なぜ』や支援を考えていく中で、自分のクラスの児童にも生かせる支援をたくさん得ることが出来た。第三者からみた意見を聞くことができ、対象児の姿に対し、視点を変えながら関わることにつながった。

いろいろな児童の姿を共有する中で、『切り替えが難しい』という姿がよく見られたが、背景には、「次に何をするかわからないから」という捉え方もあると学んだ。

支援が必要な子どもの姿を捉える際は、まずは、いつ・どういった場面でその姿が見られるのかを丁寧に記録しながら、支援方法を見つけていく必要があると学んだ。

子どもの姿は違っていても、支援の仕方は、応用しながら試してみようと思えるものがたくさんあり、多くの学びがあった。



切り替えが難しい 対して、色々な理由があるむ 面から考えてくださったのが良かったです。

木曾先生より



・3歳児クラス A児 子どもの姿

- ・子ども23名 保育者2名
- ・友達が遊んでいる姿や楽しそうな声が聞こえると周囲に気がとられ、用意に時間がかかるてしまう。
- ・新幹線や電車に詳しい。
- ・人とかかわることが好き。

実際に使用した支援カード



なぜ？

- ・先に遊びたい気持ちが強い
- ・用意がめんどくさい
- ・周りの友達がしている遊びが気になる



～保育者の支援の下用意をスムーズに行ってから遊びへ移る～

具体的な援助・手立て

- ・保育者が10秒数える。
- ・友達と競争する。
- ・「天国と地獄」を保育者が歌う。
- ・用意するものが分かるように支援カードを使用する。
- ・降園時間が早い子どもから順に名前を呼んで帰る用意をする子としない子との時差をつけ分かれやすくする。

その後の様子

- 急ごうとする姿は見られるが10秒を過ぎると11、12、13…と自分で続けてしまう。
- 「はやい！はやいぞ！」と言いながら頑張って用意をしているが友達の事も気になり「○○ちゃんのほうかはやい！」と友達を見る時間が長くなってしまう。
- ★テンポが早いためそれに合わせて用意もスムーズに行えた。
- 支援カードを見ている姿はあまりないが時々カードを見て用意を忘れていたことに気付いている。用意が出来てもカードの移動はできていないこともある。→引き続き支援カードを使用し様子を見る。
- ★時間差があることで混乱せずに用意をする姿が見られた。
- ★印は変化が見られた姿

気付いたこと

- ・コロナウイルスが流行する前までは保護者が園内に入っていた為保護者が用意をしてしまうことが多かったが玄関対応になってから自分で用意をしなければならなくなり以前よりは用意がスムーズになってきた。
- ・本児自身が終わりの会の後に帰る用意をするということが身に付き自ら用意をする姿が増えてきた。
- ・終わりの会後端に座っている子どもから順に椅子をなおしていたが帰る用意をする子どもから先になおしにいくことで友達の遊ぶ姿が目に入らなかったり、混乱しなかったりでスムーズに用意が行えた。

研究の実践全体を通した考察

本児に対して“この子はこうだから”と決めつけた考えで接してしまっている部分があった。グループで検討したことで様々な支援方法が浮かんだり、本児の行動の意図を考えられた。改めて本児の姿を振り返りなぜ？を考察したことではまるごとや当てはまらないことが見え子どもの見えている姿だけでなく気持ちも考えることが大切だということに気付いた。保護者へのかかわり方や連携の取り方などを学ぶことができて良かった。



色んな手立てを考え、それを実践することで、どのように影響があるのか？そのことを一つ一つ

木曾先生より

子どもの姿

3歳児 20名クラス（男児10名女児10名）内 自閉症スペクトラム児（療育手帳2）含む
A児 汽車、車など乗り物を繋げて遊ぶことを好む

実践報告まとめ

- ・活動の切れ目の切り替えが出来にくい

なぜ?
 •一つずつしか見通せない?
 •今の楽しいを終わりたくない?
 •室内遊びでしたい遊びが見つけにくい?

具体的援助・手立て

- ・「〇〇したらおしまいね」
具体的に1つ何か（作る、汽車を線路に走らせる、つぶすなど）をしてから終わる様に提案する

- ・言葉で知らせると同時にミニサイズの支援カードを見せる事で次の行動を知らせる



- ・友達から誘われ一緒に片付け、友達と手を繋いで入室し、次の行動に移れるよう伝える

その後の様子

- 自分で何をするかを決め、やり終わると次の行動に移る姿が見られる。

- 視覚は理解に繋がりやすいので、見るだけでなくカードを手渡しすることで切り替えやすくなる。

- 友達と一緒に手を繋ぐことで、次の行動に移しやすくなる。

気づいたこと

行動をやめたくないのは、次の行動が具体的に分からぬため、やめられないでいる。
保育者は伝えているつもりでも、A児に分かる方法で伝えなければ伝わらない。様々な方法で伝え続ける事で、A児は理解し困り感が無くなるので、様々な方法を探る事が大切。

研究の実践全体を通した考察

様々な行動をプラス思考で捉える。保育者の困りではなく、クラス集団としての困りや、A児の困りとして捉える事が個別の支援やクラス全体の支援につながる。また保護者からの困りを含めた家での様子を聞く事で、本児の姿を共有できた。保育所での成功例を意識しながら伝える事で、保護者の困りも減らせる事が分かった。

- ・うがい3回では終われず、続けてしまう

なぜ?
 •いつまでが分からず終わりを決められない?
 •一つの事しか頭に入らない?
 •回数にこだわりがない?

具体的援助・手立て

- ・コップに入れる水の量を減らし1回分程度にして、側で「1、2、3～」と数える。

- ・「〇〇〇」が3個など、数字の概念が弱いので、肩や背中などうがいに合わせて軽く触れて知らせる。

その後の様子

- 口に含む水の量を少なくしたが、コップの中の水が無くなるまで何回もうがいを続けてしまう。

- ・「3」の時でも終わらず続ける姿が見られる。



- ・自分で終わりを決められないで、「おしまい」と言葉掛けを行い終わりを伝える。

- ・「1、2、3 おしまい」と言えがなら終わりを伝えるが、4、5、6～と続けてしまい姿がある。

- 「1回、2回、3回おしまい」と伝えると水が残っていても終わる姿が見られるようになる。



木曾先生より

<子どもの姿>

3歳児 A児(診断無し)

◎クラス人数: 21名(うち療育手帳保持 1名)

◎担任 2名、フリー 1名

◎クラスの状況:

手帳保持の他にも配慮の必要な子どもが数名いるため、じっくり 1対 1 で援助をすることが難しい

①活動の切り替えが難しい

遊びたい思いが強く、次の活動を知らせても片付けに気持ちが向かない。また、登園後の着替えやトイレ、給食後の歯磨き等を嫌がり、寝転がったり走ったりする。声をかけたりタイマー等を使って促したりすると、「ギャー！」とパニックになる。

【なぜ?】

- ・活動の見通しがもてない
- ・今の遊びよりも魅力的な活動がない
- ・保育者に言われてからやりたくない。本児に「～する？」と聞いてほしい

②自分の思いが通らないと服を脱ぐ(5~6月)

散歩先から帰る時や、危険な行動を止められた時、自分の思うようにいかない時等にすべて服を脱ぎ、裸になる。

【なぜ?】

- ・気持ちの切り替えが難しい
- ・パニック時の感覚の過敏さ
- ・脱ぐことで自己表現をしている
- ・注目を向けるため

<具体的な援助や手立て>

①の姿について

- ・本児の意思を聞きながら行動する
「着替えよう」ではなく、「着替える？」
「タイマー何秒にする？」等...
※自分で決められるようにする
- ・できた時、具体的に言葉にして褒める
- ・活動の流れを事前に知らせる

(4月当初から使っていた絵カードを使う)



②の姿について

- ・発散の仕方を受け止めつつ、「恥ずかしくない？」
と声をかける
- ・脱ぐ以外の発散方法を本人に聞く、一緒に考える
- ・脱いでいい場所を提供する

<支援のその後、考察>

①の姿について

- ・本児の思いを聞きながらの支援では、気持ちが乗る時とそうでない時との差が大きかったが、自分で決めたことのため、切り替えは今までより少し早くなつた。
また、その姿を抱きしめながら褒めると、嬉しそうな様子が見られた。
- ・絵カードを使った支援では、本児のみに使った時には、効果は一時的だったが、他児に使っていると、「Aもやる」と一緒にしたり、他児と競争したりする姿が見られた。一緒にカードをする友達の存在が、本児には大きかったのではないか。

②の姿について

- ・グループ討議を行った翌日から、裸になる行為がパタッと止まった。なぜ止まったのか？については理由はハッキリしないが、担任の「(脱ぐのは)恥ずかしいよ？」という言葉が頭に残っていたのか、または母親に脱ぐのを止めるよう言われたからなのか、と考えている。
- ・今後、本児なりの発散方法が出てくると思われるが、その都度受け止め、発散方法について一緒に考えられるようにする。

<研究の実践全体を通した考察>

子どもの姿から考えられることを自分なりに考えたり、グループ討議で様々な視点から意見をもらったりする中で、その姿の「なぜ？」や、支援の方向性等について、しっかりと考えることができた。
支援がその時に合うかどうかは、試していかなければ分からぬ。上手くいかなかった時でも、その援助を変化・改善させ、継続していくことが大切だと実感した。



歯磨きは歯ブラシを口の中に入れられる比 うことなので、安心感がなく身の危険を感じて嫌がることがあり

木曾先生より

〈子どもの姿〉

- 3歳児・18名クラス（1名加配あり）
- 好きな遊び（ブロック・プラレール）だと集中力が持続するが、好きな玩具がなかつたり、片付けになると走ってしまったり部屋から出てしまう姿が多く見られる。
- また、ロッカーに隠れたり、ぶら下がったりするなどの危険な行動が多々ある。
- 片付けやトイレに行くなどの活動の切り替えになると走ったり、部屋を出たりとその時の活動に取り組めない姿が見られる。

〈具体的な援助・手立て〉

- タイムタイマーの使用
 - トイレや片付けなど『〇分までに終わることができるよう』とタイムタイマーを使い視覚的に援助。
- 全体での声掛け
 - 保育者からの一対一の声掛けがいやそうだったので本児にその都度声を掛けるのではなく、『トイレには歩いて行きます』『トイレをしたらお部屋に帰ります』とその都度クラス全体での声掛けを行う。
- 走る子どもを保育者がキャッチ
 - 走ってしまった時に子どもを言葉で制止させるのではなく抱きしめ気持ちを落ち着かせたうえで簡潔な単語で伝える。

〈なぜ〉

- とにかく走りたい。走るスペースがあると走ってしまう。
- 自分の楽しいこと以外したくない。
玩具で遊べなくなると走ったり、ロッカーの中に隠れるなど危険な行動に移ってしまう。

〈様子・気づいたこと〉

- タイムタイマーの使用…時間を気にしながら行動することで片付けやトイレに行く際の寄り道や危険な行動が少なくなった。
時間がカウントされるのでゲーム感覚で楽しんでいるように感じる。
- 全体への声掛け…全体への声掛けをしたことで保育者や友達から『〇〇するよ』と何度も伝えたことでスムーズに行動できることが増えた。しかし、時間が経つにつれて友達からの何度も指摘が嫌だと訴えることも増えた。
- 走る子どもを保育者がギューとキャッチ…子どもが遊びと勘違い、走ることは止めれるが遊びと勘違いしてしまい逆にトイレに行ってからお部屋に帰ってくる時間が長くなった。

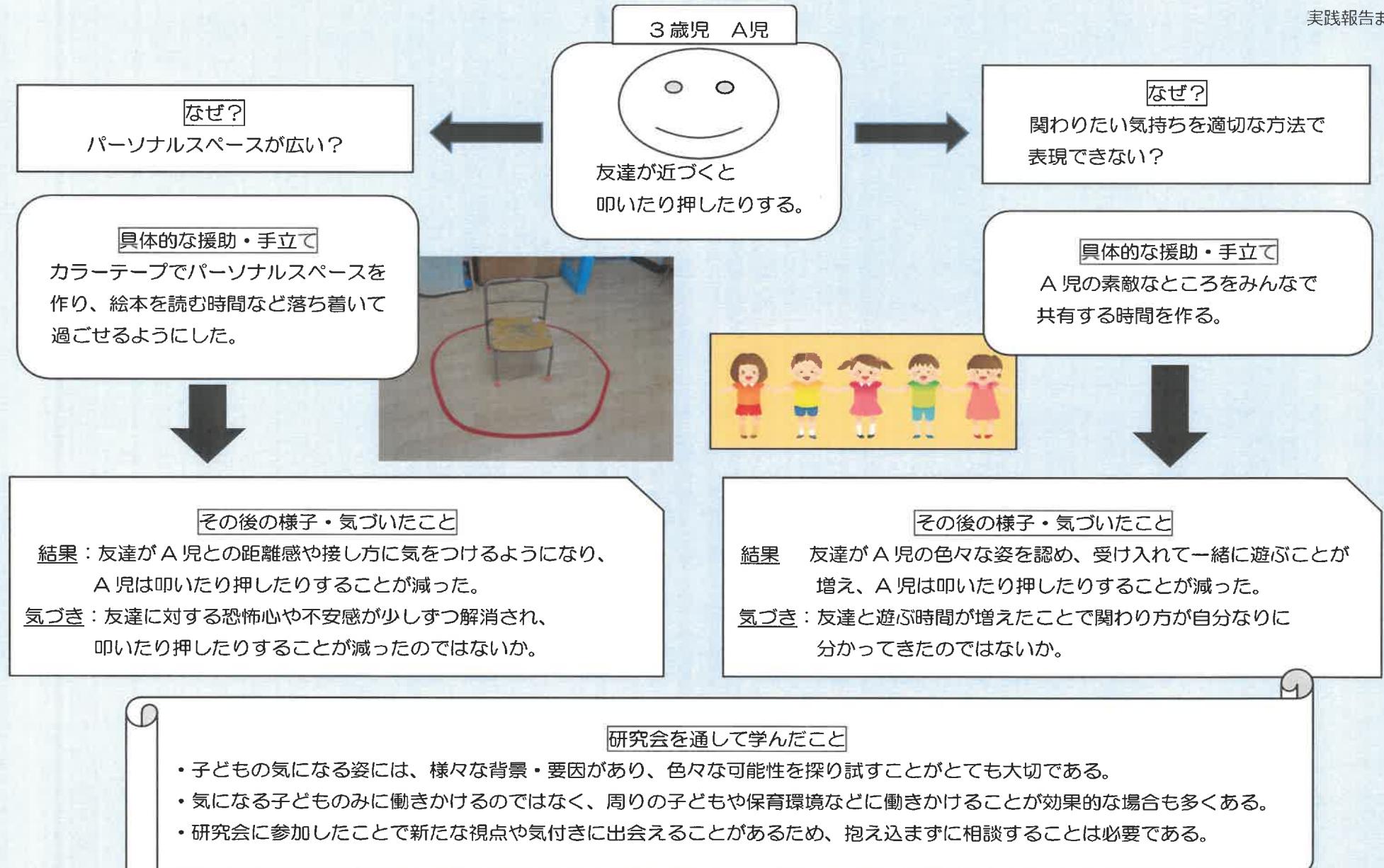
〈全体を通した考察〉

今回自分の事例を提供してグループで話し合って、色々な解決方法が出た。そのうちの3つを試してみて成果も見られたが逆効果もあった。上手くいったタイムタイマーの使用もカウントダウンのゲームに飽きてしまったらまた、新しい策を考えないといけない。その為に普段から本児や他の子どもたちの様子をしっかり見て常に過ごしやすい環境を整えようと思う。今回の研修を通して改めて子どもをよく見て色々な観点から見る事や考える事が大切だと感じた。



複数実践してみた結果から振り返って ることが良 ですね。そこから、再度「なぜ？」それ

木曾先生より



木曾先生より

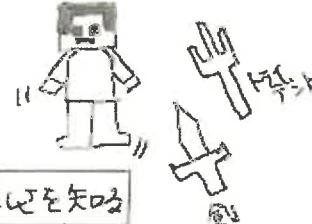
その子に個別に手立てをすることだけではなく、クラス集団の中でいいところを共有する」
など、クラス全体に働きかけで「くわうことも非常に重要ですね。

3才児 A児(27ヶ月)

子どもの遊び…まじとコーナーのフォークを手に持つて歩き回る。

「遊び」のアイテムに見立て
ゲームの世界に入りこんで遊んでいる

なぜ?・マイクラフトというゲームの中が楽しい
・おもちゃ(ブロックなど)の使い方を知らない
・手元の不器用さがあるので作れない



ねらい：おもちゃの使い方を知る・組み立てて遊ぶ楽しさを知る
→(支撐性不足)…保育者と一緒にブロックなどを組み立てて遊ぶ

＜その後の様子＞

2期頃…会話をゲームの中での話がないが、自分から保育者に話せば「(ニ)ブロック」として、(保育者が)見立てるところを見たり。
まさに中堅を見立てて遊んでいる。(ニ)とブロックを保育者に(ニ)へん手でくくる。少し笑顔を自分でなめ。

3期頃…ブロックで自分で剣を作ったり、アイテムを作り、それを手持つ歩き
自立はある。2Dマーマーを弓に見立ててのをきこんでいる。
→コートの席に座って(冒頭)家を作て人形を作て(アレル)。
3-7歳に人形作って(アレル)…歩きながら遊ぶ。反対と一緒に作り会話を基盤に
なめらか遊べるようになっている。仲良くなれて反対に対して
自分のしゃべることを言う(アレル)、困っていると保育者が
伝えに来て(アレル)。家のなかでも保育所での出来事を
話す(アレル)。保育者でも笑顔で(アレル)見られる
ようになっている。

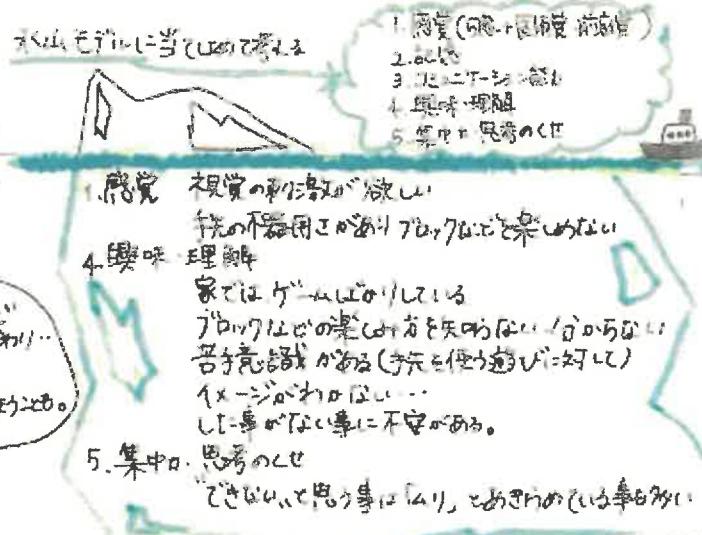


想つき

本児にとって楽しい遊び方は、マイクラフトのゲームの世界に入りこんで、おもちゃをそのアイテムに見立てて遊ぶ事である(アレル)。ブロックの使い方を知らない。コートに座って組み立てて遊ぶ、中で反対との関わりが増えていく(アレル)。他のおもちゃでも組み立て(アレル)、粘土で何かを作った(アレル)中で表現できる事を楽しむ事もでき(アレル)様々の事に興味がでてきている。



木曾先生より



研究の実践を通して考察

- ①おもちゃの使い方を知るために保育者と一緒に遊んでいく中で本児の発達段階の過程でじっくりおもちゃで遊び込む事は足りていなかったのではないかと想う。一方で関わっていくと興味を示し不満で遊びを止めさせる事があった。
- ②経験不足で「アレル」「できなり」と言ふ事が多く、「一緒にしよう」と保育者が言うとやがれたりとする事がある。実際に自分で「自ら」「する」と(アレル)する事が多くなった。
- ③おもちゃの使い方を知る、という事に対する支循をしていく[アレル]ため、本児について多くの事を知ることができた。
- ④保育者と一緒に遊びの中で、それに興味を持ち、「反対」でも関わっていく事により(アレル)表情豊かになり、言葉を多く聞く事ができる。→言葉の理解や、言葉詮意について知る事ができた。

○子どもの姿①

4歳児 男 療育手帳を所持

部屋の中を何度も往復し、急に大きな声を出すなど落ち着かない様子

○なぜ？

- ・周りの刺激が入り過ぎて気が散る？
- ・何で遊んだらいいかわからない？
- ・室内を往復することで気持ちを落ち着かせている？

○具体的な援助・手立て

- ・本児の好きなおもちゃを用意し遊びに誘う
- ・子どもの視界を遮られる位置に保育者がついて見守る
- ・ロッカーや壁の方を向いて活動できるようにする
- ・室内を走りたくなったら運動コーナーに誘い、トランポリンなどで身体を動かし発散する

○その後の様子・気付いたこと

- ・好きな遊びや得意な遊びを十分に楽しみ、落ち着いて遊べる時間が長くなってきた
- ・また好きな遊びを通して、友達との関わりながら遊ぶことが多くなる

○子どもの姿②

4歳児 男 療育手帳を所持

排泄を誘うと行くことを拒み、ギリギリまで我慢し慌ててトイレに行くが、濡れてしまい1日に何度も着替える日が続いた

○なぜ？

- ・トイレのにおい、水の音、雰囲気などが苦手なのか？
- ・排泄のタイミングが難しいのか？

○具体的な援助・手立て

- ・トイレを嫌がる原因を探り対処の方法を考え伝えることで、安心感をもたせる
- ・こだわりを生かして、特定の便器を決める
- ・失敗したときは素早く始末し、保育者との信頼関係を大切にする

○その後の様子・気付いたこと

- ・不安な気持ちに寄り添うことで少しずつトイレに対する違和感は和らいだ
- ・「ここの便器がいい」という本児のこだわりを生かすことで安心感をもって排泄を行えるようになった。

○実践研究全体を通した考察

一年間この研修に参加させていただき、自分のクラスの気になる子・他の園の気になる子の様子を聞き、意見を言い合うことで様々なヒントや考え方を知ることが出来ました。実際にしている視覚支援方法を自分のクラスでも実践していくたいと思います。実りのある研修でした。



木曾先生より

クラスでの生活の中で一緒に空間にいることを嫌がることはないが、活動の内容によっては参加をすることが難しいこともある。

クラスのみんなと一緒に空間にいることに慣れることをメインに考えて接している。友達と関わろうとすることは少ないが、保育者に対してはクレーンハンドで気持ちを伝えようしたり、態度で知らせようとする。



自閉・こだわり

一人で遊ぶことが得意。絵本気は気に入ったものであれば一人で見ている。気に入ったものは自分で食べることができる。赤が好きで、お絵かきの際は赤を選ぶ。

障がいの特性・子どもの個性

声のトーン（表情も）で表現する。声かけは理解できている

クラスで
の様子4歳児
A児

【気になる姿②】

言葉があまり出ず、嫌な気持ちの表現は聞く
パニックになることがある

なぜ?

言葉をまだ覚えている途中
なのでは?

なぜ?

一对一での関わりの中で言葉を
代弁したり知らせていく

具体的
的
援
助

本児の行動を見て、「これは？」
などの言葉をかけていく

絵本を見る中で、指差しをしようと
したり、出てくる食べ物を食べさせ
ようとする姿が出てくる
「モグモグ」の単語が出る

その後の
様子

単語が本児から出てくるこ
とがまだ少ないが、聞いたり
ることは少くなり、
顔を背けたり本児なりに態
度で示そうとすることが増
える

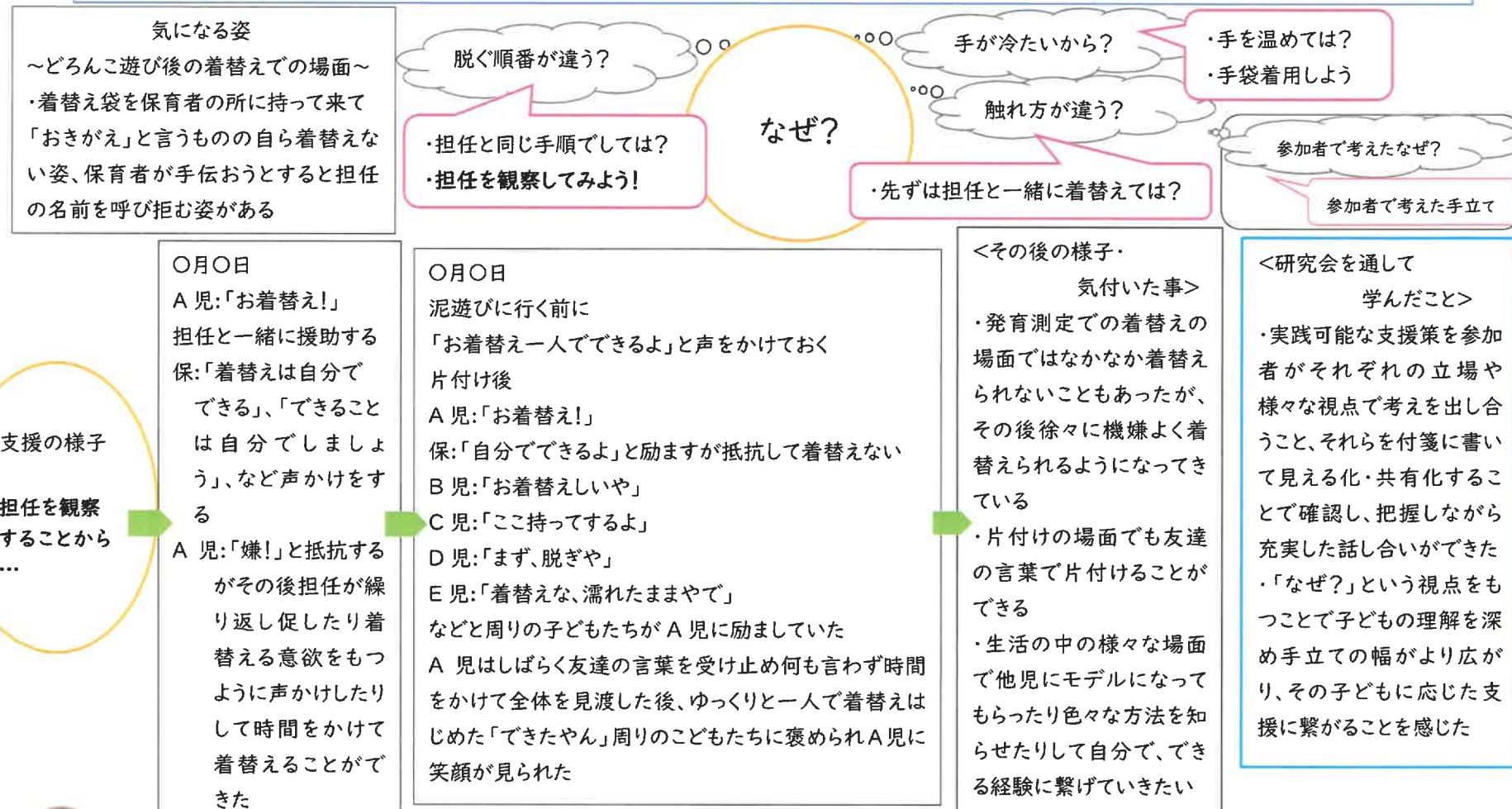
【研究の実践全体を通した考察】

子どもの気になる姿を客観的に考えて様々な角度から「なぜ?」と子どもの姿を考えることによって、支援の方法を考えることができる。試したことによる子どもの姿によってまた新しい支援の方法を考え、子どもの「できた」という気持ちにつなげができるように考えていくことの重要性を感じる。うまくいかないことで支援をする側も落ち込むことがあるが、次のステップにつなげていけるよう支援方法を模索していく必要がある。

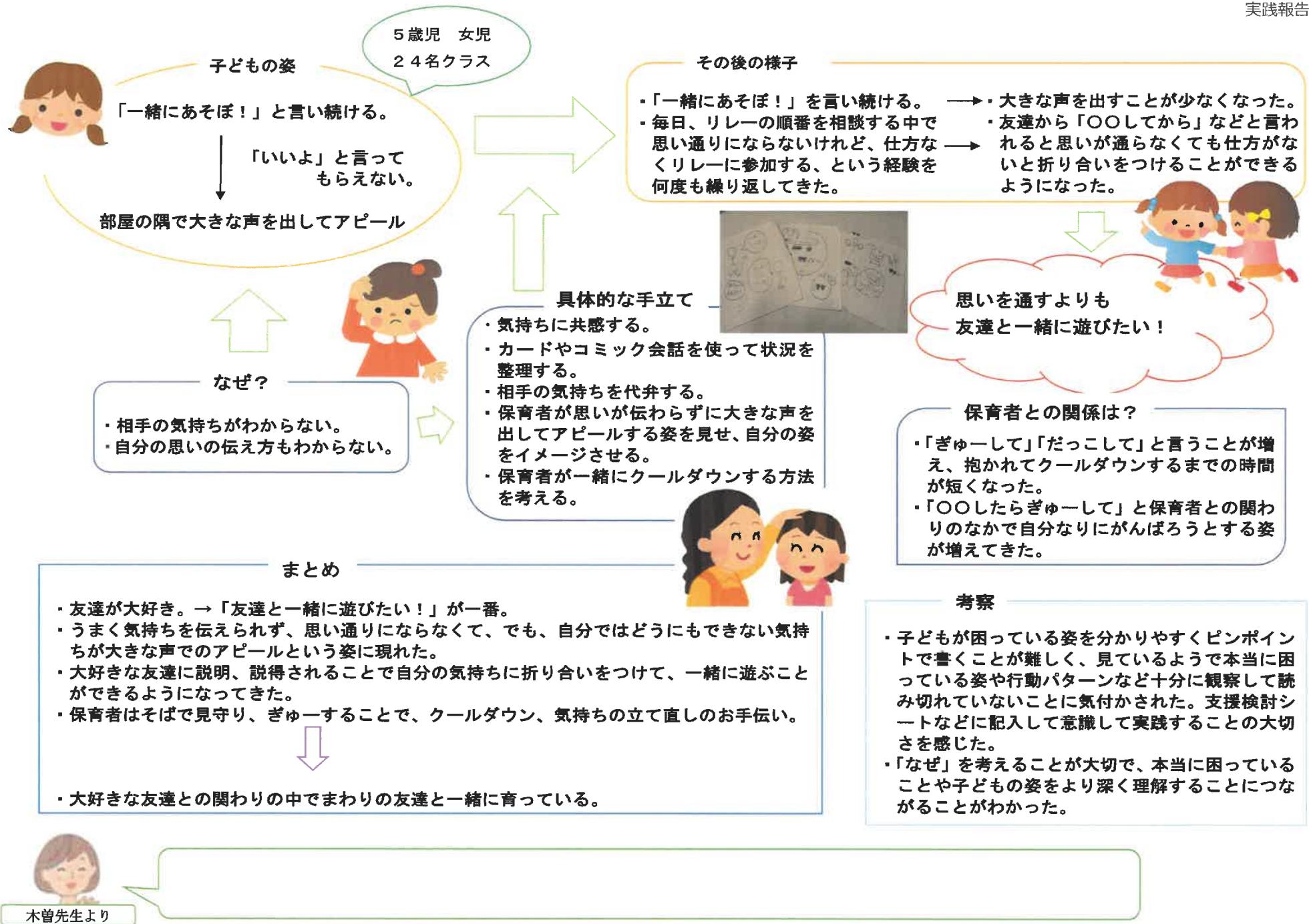
その子の世界を広げるためにも、支援の保育者だったら分かるのではなく、他の保育者でも分かるようにしてあげることが大切。その子からの発信や意思伝達手段として絵カードを使う方法もあります。

子どもの姿(4歳児A児)

- ・つま先立ちで歩くことが多い
- ・一度に複数の指示は難しい
- ・見通しをもったり、順番を待ったりすることが苦手
- ・体を動かすことを好む・体に触れられることは苦手
- ・生活リズムの変化に戸惑い感情がもつれる
- ・クラス活動に興味を示し、参加意欲が強い
- ・感情が高まるときには張りがまし大きな声になる
- ・思い通りにならないと泣き出し気持ちの立て直しに時間がかかる
- ・簡単なフレーズを知り挨拶や思いを伝えようとする(「おはよう」、「入れて」など)
- ・マーク、色、名前など繰り返し言う
- ・保育では担任の言葉をうけ周りの様子を見て同じように行動しようとする
- ・大人の支援より友達の手助けを素直に受け入れようとする



保育者の関わり方を見て、周りの子はその子への関わりを行ってきます。保育者が根気よく丁寧に



《障がい性》
 ・知的障がい
 ・言葉の遅れ
 ・衝動性

《個性》
 ・手先が器用
 ・体を動かすことが好き
 ・集中時間は興味の有無
 によって変わる

《集団》

- ・初めて見る・聞くものに興味を示す
- ・友達がすることをまねっこしようとしている

①気になる子どもの姿

- ・5月入所の5歳児
- ・竹馬に乗りたくない
- ・保育者によって姿が違う

②なぜ??

- ・自信がない
- ・楽しさが分からず
- ・今したいことが他にある
- ・担任Bとの関係が浅い
- ・担任Aと取り組むものだと

《クラスの背景》

“なかまパワー”をテーマに竹馬や太鼓の練習に意欲的に取り組んでいる。転所してきた本児にも保育所のことを教えてあげるなど、優しく関わっている

③具体的な援助・手立て

- ・個人レッスンの時間を作り、自信をつけておく
- ・事前にチケットを渡し「みんなと一緒に5分竹馬に乘ろう」と約束をしておく
- ・最初は担任Aが関わり、楽しくなってきたところで担任Bにバトンタッチをする
- ・担任Bと一対一で遊ぶ時間を作り、信頼関係を築いて

④その後の様子・気づき

- ・集中している時は30分近く竹馬に取組む日もあった
- ・視覚支援を使うことで、一つ先なら見通しを持って過ごすことができた
- ・担任と一緒に取組むリズムができるとルーティーンになり、応援保育者にバトンタッチしても取組むことができた
- ・本児が取り組んでいない時間も友達の姿を応援する参加の仕方ができた
- ・日々応援保育者と関わり方と一緒に考え、改善していくことで本児への理解を深めることができた

⑤考察—一年間研究会を通して—

- ・見たことのない子どもの姿を聞いたり、援助を考えたりすることは、保育者としての想像力を鍛える良い機会でした
- ・一人だと煮詰まってしまうことも、グループの先生方と考えていただくことで、視覚支援や言葉かけなどのアイディアをたくさん得ることができました。また、講師の木曾先生にも直接声を掛けていただく機会はとても嬉しかったです
- ・コロナ渦の為リモートでの開催など、創意工夫をして参加させていただき、ありがとうございました

《視覚支援》



木曾先生より

研究会に参加して～気づきや学んだこと～

- ・子どもの行動に対して、原因や背景を探り、「なぜ?」と考え、仮説を立てる大切さを改めて実感した。
- ・一人の子に対しての支援が、他の子どもたちにとっても有効な支援になることも意識して、クラス全体への支援を考えていきたい。
- ・個々の個性を大切に、また、できないことに目を向けるのではなくその子のもっている強みを伸ばしながら支援・援助ができるように考えることが必要だと感じた。
- ・子育てで困っていることを保護者から聞くことで、保育所の姿を伝え、子どもの姿を共有し、より保護者の困り感に寄り添うことができた。その結果、子どもへの支援につながり学びが深まった。
- ・困っていることがあっても解決方法は一つではないこと、いろいろな視野から考えることや見守ることが大切だと思った。
- ・支援シートに書き出すことでより分かりやすくなり、私自身の気付きと学びがたくさん得られた。
- ・職員と一緒に「なぜ」を考える時間を共有したり、意見を出し合ったりすることができた。
- ・支援策を様々な角度から考えることで幼児理解を深め、支援の幅が広がり具体的な言葉かけや手立ての工夫を学ぶことができた。

グループでの事例検討に参加して～気づきや学んだこと～

- ・自分では思いつかないような支援の方法をアドバイスしてもらったり、自分では気づかないような角度から子どものことを見てもらえ、自分のクラスの子どもの支援に活かすことができた。
- ・自分のクラスと似たようなケースもたくさんあったので、お互いの手立てを共有することができ、新しい手立てを吸収することができた。
- ・初めて見たような支援ツールもあり、簡単に作れそうなものも教えていただき、子どもたちにとって分かりやすく楽しい保育所生活が過ごせるよう今後活用していきたい。

～講師講評～

今年度も新型コロナウイルス感染症の影響から、オンラインでの実施となった回がありました。慣れない方法の中でのグループワークは非常に難しく、参加者にとってもストレスが大きかったんだろうと思います。年度途中からは集合してのワークが可能となりましたが、パーテーションで互いの声が聞き取りにくかったりと苦しい場面もありました。その中でも、積極的にご参加いただき、実践を積み重ねてくださった参加者のみなさんのおかげで、無事に研究会を終えることができました。みなさんに改めて感謝申し上げます。

こうした制約の多い中でも、事例検討の機会が複数回とれたこと、また検討後の実践報告の時間があつたことで、グループ内のみならず、参加者全体で学び合えたと思います。特に、「実践したことで子どもの姿が大きく変わった」という報告には、私自身も非常に勇気づけられました。保育者にとっても「できた、わかった、たのしいね」は重要なことで、子どもの変化を感じられることが次の保育の動機付けになると痛感しました。今後も保育者がやりがいを感じ、それが子どもや保護者に良い影響を与えていくような好循環を生み出す研究会を目指したいと思います。

一方、実践による子どもの変化を感じにくかった方もいると思います。しかし、何よりの成果は、みなさんが子どものことを改めてよく観察し、理解しようと努めてくださったことです。今回改めて一人の子どもについて対話しながらじっくり考えてみることで、これまで見えていなかったその子の姿や思いに気づくことができたのではないかでしょうか。その子のことを知ること、つまり「子ども理解」が保育の基本だと感じます。「どうしたらよいかわからない」と壁にぶつかったときにこそ、改めて子どもの視点にたち、子どもの思いを知ろうとすることから始めていただければ幸いです。

そして、どうか一人で抱え込まず、今回出会った研究会の仲間や職場の仲間などと語りあってください。保育者もみな多様です。互いの違いを尊重し、その違いを活かしあうことで、子ども一人ひとりの「できた、わかった、たのしいね」を支えていけるような保育になることを願っています。

木曾 陽子